

恵満

Illustration
ぽこにゃん

体験版

独房姦禁

-Solitary Confinement-

成人向け
R18
ADULT ONLY
18歳未満
購入・閲覧禁止

著：恵満

画：ぼこにゃん

体験版ではシュエンが捕まってポコポコに殴られる
「#1 クソガキCEO拉致される」まで読めます。

#1 クソガキCEO拉致される

「ん？」

シュエンが微睡まどろみから目覚めると、薄暗い天井が視界に飛び込んできた。埃っぽくて汚れている。いつものオフィスではない。

状況が分からず周囲を確認すると、屋内ということに間違いはなく、床もまた埃っぽい。どこかの倉庫のようだった。

「なによ、ここ？」

見覚えのない眺めに、思わず眉間に皺が寄る。

訝しんでいると四人の男が入ってきた。いずれも体格に恵まれ、しかしガラは悪い。アウトタームを彷徨うろつくチンピラみたいな服装で、見るからに下層階級の人間だった。

「ひひひっ、ホントにいるぜ。ミシリスのCEOだ」

「マジかよ。冗談だと思っただぜ」

「こんなにも面白い話があるなんてなあ」

にやけ口から、ねっとりとした低い声が漏れ出ている。

バラバラの足音でそいつらが近付いてくると、シュエンは立ち上がって睨みを効かせた。

「おい。お前」

先頭にいたリーダー格と思しき男に話しかけるも、ニヤニヤ笑うだけで言葉を返してこない。「おい、お前！」

シュエンは口端を吊り上げて男の脛を蹴り飛ばす。しかし、体格差のせいでビクともせず、爪先に痺れが走った。

(痛っ…… クズどもめえっ!!)

蹴った事を後悔しつつ、涙目を隠す。自分が絶対的な権力者で、相手よりも確実に立場が上だという自負があった。だからこそその強気を崩さない。

「私の話を聞いているの？ そのお前よ、木偶でくの坊！」

「けっ！ 聞いていた以上のクソガキっぷりだな。まずは黙しつしてやらねえと。おい、こいつを押さえておけ」

リーダー格の男が指示すると、ひとりしがシュエンの背後に回った。

そのまま脇の下に腕を回して羽交締めにする。いきなり触れられて「きゃっ……」と小さな悲鳴を漏らしてしまう。

(なんなのこいつら!! この私に触るなんて!!)

憤怒でシュエンの顔が歪んだ。射殺すように目を吊り上げてリーダー格の男を睨む。知らない相手の肌が触れて不快だった。汗をかいているのか、酸っぱい臭いが鼻につく。

「何のつもり？ 今すぐ離せ。でないと酷い目に遭わせ……」

「いひっひひいっり、リーダー！ この小娘、すっげえいい匂いがしますぜ！ 桃みてえな甘い匂いだあ！」

「ひっ…… おい、お前！ すぐにその汚い顔を退けろ！ 私の匂いを嗅ぐな！」

「すーっ…… はーっ……！」

「っ！ は、離せっ！ 気持ち悪い！ 離せ、このクズ！」

暴れるシュエンの首筋に、髪に、男は無遠慮に鼻の頭を突っ込んで空気を吸い込んでいく。酒臭さが混じったヌルい吐息をかけられると、生理的な嫌悪感から涙目になってしまった。

「このお！ 息が臭いのよ、ふざけるなっ！」

バタつかせた踵が偶然にも男の膝に突き刺さり、無様な悲鳴が響いた。一瞬、力が抜けたのを見計らって腕の拘束から逃れる。

息の上があったシュエンは前のめりに倒れた男の頭を蹴り飛ばす。

「ぐえっ!!」

「この私に気安く触るなんて！ このクズ！ クズ！ クズっ!!」

溜め込んでいた怒りが爆発し、ボールのように男の頭部を爪先で抉った。

ミシリスのCEOがこんな汚い連中に辱められるなどあってはならない。相応の報いを与えなければ気が済まなかった。

靴底が剥がれるほど蹴り続け、匂いを嗅いできた男が痙攣けいれんを始めたところでようやく攻撃を止める。シュエンは頭の上に足を乗せて吐き捨てた。

「どう？ 思い知った？ お前のようなクズの分際で、思い上がるんじゃない」

「あー、お嬢ちゃん。もういいか？」

「ああん？」

残った三人の男は退屈そうに欠伸をしている。仲間が蹴られているというのに、一向に助けに入らなかった。シュエンの怒りは当然、そちらへ向く。

「さっさと出て行け。お前たちをどうするかはじっくり考えてやる。アウターリムへ追放するくらいじゃ済まさないわ」

「リーダー、このガキ……」

「状況がまるで分かってねえ。ま、お仕置きだな。今度はちゃんと押さえておけよ」

「……やめろ！ 私に触るな！ 私を誰だと思ってるの!?!」

「ガキのくせにヘソ出してキワどいカッコしてるよなあ。スカートもパンツが見えちまいそんなくらい短い。金持ちのファッションってのは理解できねえわ」

今度の羽交締めは強さが全然違う。先ほどの男よりもずっと筋肉質で腕が太い。脇の下から持ち上げられ、空中で足をバタ付かせてもビクともしなかった。蹴り足のせいでスカートが捲れ上がると純白の下着が覗になる。

正面に立ったリーダー格の男は呆れた顔をした。

「パンツは色気がねえなあ。どれ、もつとよく見せてみるよ」

別の男に両脚を押さえられ、太ももまでパンツをずり下ろされる。

股間が空気に触れると流石のシュエンも顔を真っ赤にして脚を閉じた。だが両腕を押さえられているため、捻れた下着と陰部を隠す術は無い。スカートを摘み上げたリーダー格の男は嘲笑う。

「毛が生えてねえ。ツルツルだぜ。おまけにマンコの入り口もピタリと閉じてやがる」

「このおっ！ 何見てんのよ!?! 殺す！ 殺してやる！」

「おー、おー、怖い怖い。一応、処女だか確認しておくか。おい、脚を開かせておけ」
小便をさせられるみたいなのがポーズで開脚させられ、ついにシュエンは目を背けてしまった。羞恥が怒りに勝ったのである。

太い指が恥丘に触れ、ビクリと震えた。そんな場所、これまでに誰にも触らせたことがない。
ワレメを指で開かれると冷たい空気が流れ込んでくる。

「やめな……さい。見るなあ……」

「キレイなマンコだなあ。ピンク色だぜ。奥には処女膜も見える」

「言うなあ……」

「ははっ、見られて感じちまったか？ クリトリスがヒクヒクしてるぜ？」

「う、うるさい。そんなわけないでしょ……」

陰核に男が息を吹きかけてくる。「ひっ」と悲鳴を上げたが、脚を閉じられない。

小汚い男に女性の大事な部分を凝視されていると思うだけで腑はらわたが煮え繰り返る。今すぐ全員を地獄へ叩きと落としてやりたい。

（わ、私はミシリスのCEOなのよ。それをこんな目に…… 女性器を見られて、わら嗤われるなんて…… よくも……）

食い縛った歯が砕けそうになる。拘束を解くほどの力が無いシュエンは、相手を睨むしかなかった。

「おっぱいも見せてくれよ。小ぶりで話にならねえだろうけど」

「はあ？ ふざけるな！ どうしてお前みたいなクズに……」

「あー、はいはい。怒り方がワンパターンなんだよなあ。ま、いいか。勝手に見させてもらうぜ」
服を捲られると小さな丘が二つ、飛び出る。

普段からヘソを露出しているシュエンの腰回りは細く引き締まっていて、スレンダーな体型だ。ピンと尖って上向いた乳首は陰部と同様に綺麗なピンク色をしていて、ほっそりした身体から見て分かる程度には盛り上がっている。

「やっぱ小せえな。肉付きが悪いガキの身体だ」

「くっ……」

「一丁前に悔しそうな顔してんじゃねえよ。乳首だけピンピンに勃たせやがって。見られて感じてるんだろ」

「はあ？ そんなわけないでしょ。おめでたい頭してるわね。それに、さっきからガガガキ言いたい放題してるけど、その子供相手に興奮してるんじゃない？」

男のズボンの股間が盛り上がっているのを見逃さず、チクリと刺してやる。

性的な知識はある程度持っているから、そいつの身体の変化が何を示しているかぐらい把握していた。シュエンにとっては精一杯の強がりである。

「言われちましたね、リーダー」

「うるせえ。テメエは黙ってろ」

脚を拘束している男が下卑た笑いを上げ、力を緩める。その隙を見逃さずにシュエンは脚を振り上げた。逃げるというよりは一矢報いるつもりである。

つま先はリーダー格の男の膨らんだ股間を直撃し、低い呻き声が漏れた。感触は十分、見事に

金的を射抜く。

悶絶しながら床に転がるのを見て、ここぞとばかりに笑い飛ばしてやった。これまでの鬱憤うっぷんを晴らすかのように特別の侮蔑を視線に込めて見下ろしてやる。

「はっ、情けない。子供に蹴られたくらいで無様ねえ。クズはクズらしく床に這いつくばっていればいいものを……」

「このクソガキがあっ!!」

すぐさま起き上がった男は前屈みのまま手下に目配せし、シュエンの身体をさらに強く押さえさせる。

また蹴り飛ばしてやろうと目論んでいたがあっさりかわされ、男の拳がシュエンの鳩尾みぞおちに深々と叩き込まれた。

「かはっ……!?!」

肋骨の下から内臓を持ち上げられる。

お腹の中身が大きく凹み、やや遅れて衝撃が身体の上下に走った。

迫り上がってきた胃液が喉を焼く。水面に落ちた雫のように、拳を中心とした痛みが身体の内側へと伝搬していった。

頭の中が真っ白になったシュエンの眼球が揺れて、涙で微睡んでいく。

内容物が口内まで達すると酷い臭いが鼻を抜け、ついには耐えられなくなって吐瀉としゃしてしまっ

た。
「うぶっ…… おええっ……」

「うわっ、いきなり吐くんじゃねえよ！」

びちゃびちゃと汚らしい音が部屋の中に響く。目の前の床には胃の中身が広がり、男たちが顔を顰めている。

「ぎゃはははっ！ こいつ、鼻からもゲロ出てるぜ」

「臭えっ！」

腹部の鈍い痛みを堪え、泣きそうになるのを我慢する。

醜態を晒したことよりも痛痒の方が深刻だった。うまく呼吸できずに顔が青ざめる。

「ゲホッ、ゲホッ…… クズどもがあ……」

口の中が酸味で焼かれ、吸い込んだ空気がヒリヒリと染みる。

それでも眼力が衰えないのは一重に意地があるから。こんな訳のわからぬ状況で、下衆どもにいいようにされたくはない。傲慢不遜で塗り固められたプライドがシュエンの身体を支えている。

「お？ 腹パンでゲロったくせに、まだ威勢がいいな。だが勃起した乳首くらい隠したらどうだ？

見せるほどの胸じゃねえだろ」

「黙れ、クズ！ 殺してやる。ここを出たら、ありとあらゆる手段で追い詰めてお前たちを殺す！

地上に送り出して、ラプチャーの的にしてやる！」

「おお、怖い怖い。どこからその元気が湧いてくるんだかなあ」

「り、リーダー……」

凄まじい剣幕でリーダーの男を罵っていると、シュエンに頭を蹴り飛ばされた下っ端が目覚ます。こめかみには血管が浮き出て、顔は紅潮していた。肩を怒らせてシュエンへと近付く。吐瀉

物を踏んでも気にした様子はない。

「このクソガキ、もう犯っちゃまってもいいんですよね？」

「あん？ お前、血迷ったか？ 誰にお伺い立てているんだよ。まだに決まってんだろ」

「腹の虫が収まらねえんですよ。俺の頭を散々蹴りやがって……」

「だとさ、ミシリスのCEOサマ。どう落とし前を付けるんだ？」

「はっ、私の知ったことじゃないわ。いきなり臭いを嗅ぐなんて変態みたいな真似して、いい

ザマよ。どうせ大して脳みそなんて入ってないんだから頭を蹴られたってどうってことないでしょう？」

「このクソガキがあっ!!」

さらに顔を真っ赤にしてシュエンに掴み掛かってくる。そのまま身体ごと引たくって床へと倒した。

受け身を取れず頭を打ったシュエンは短い間、気を失ってしまう。意識が戻ると下っ端の男が馬乗りになっている。

しっかりと体重を掛けられていた。重くて動けそうにない。見上げるように睨み返してやったが、そいつの目には理性が感じられなかった。息が荒いし、両方の拳を握り込んでいる。

シュエンは後頭部に痛みを残したまま罵り続けた。

「クズ！ 能無し！ 図体だけのノロマの食い扶持なんてアークには無いの。壁の外でゴミに埋もれて死ぬのが関の山。分かったら、さっさと臭い身体を退けなさい」

「黙れえっ!!」



「おぶっ!!」

馬乗りのまま拳が振り下ろされ、シュエンの頬を捉える。頭蓋が歪み、視界が一瞬途切れた。殴られたのだと理解するまでに時間を要する。ヒリヒリする頬で信じられないと言った目を下っ端の男へ向けた。

腹を殴られたときよりもショックは大きい。女性の……それも子供の顔を殴ったのだから。

「殴った？ この私の顔を？ おい、お前！ ふざけるな！ 私が誰だか分かっているの!」

「うるせえ、黙れってんだよ!!」

今度は反対側の頬を殴られる。

口の中が切れて血の味がした。

「また殴った！ 救いようのないクズめ！ お前だけじゃない。お前の周りにいる人間も全部、始末してやるんだから！」

「喋るんじゃないよ！」

殴打は続く。一発、一発とシュエンの顔がだんだんと腫れ上がっていった。目測を誤ったときは目に当たり、眼窩を紫色に染める。鼻にぶつかれば一筋の血が流れ、唇まで垂れた。

それでも男は殴るのをやめない。一方のシュエンも意固地になって罵声を浴びせ続けた。

目に涙を浮かべながら「クズだ」「ゴミだ」と下っ端の男を否定していく。

そうしているうちに淡麗な容姿を見る影を失くしていった。

「はあ、はあ、はあ…… おい。クソガキ。許してください、って謝りやがれ。じゃないと鼻を潰すまで殴ってやる」

「く……ずめえ…… しね……」

「このお……」

「その辺でやめておけ」

ムキになる下っ端の肩を叩き、リーダーの男が静止してきた。

殴っている方も拳の皮が剥けて血が滲み出ている。そいつの尻の下ではシュエンの身体がぐったりと弛緩していた。

気を失っている。下着を脱がされた股間からは水溜りができてスカートを濡らしていた。

「シヨンベン漏らして気絶してやがる。みっともねえ」

「リーダー、こいつはどうします?」

「焦るな。どうせ逃げられないんだ。時間はあるんだから、たっぷり楽しもうじゃねえか」